

## チェルノブイリ原発事故をめぐる文学（3）

### 若松丈太郎詩論

—現実凝視と飛躍する想像力—

安元隆子

Takako YASUMOTO. A study on Wakamatsu Jyotaro. *Studies in International Relations* Vol.36, No.1. October 2015. pp.43 – 52.

Wakamatsu Jyotaro has been warning people about the dangers of nuclear power through his poetry from a previous the long before the nuclear power plant accident in Fukushima.

In 1994, he visited Chernobyl for the first time and wrote the poem “Sad land”. The poem “The town has become a ghost town” was expressed his method making poems. His method when writing poems is to look at the reality, and to make full use of his imagination. His consciousness goes alternates between reality and imagination freely. He feels he has a mission to write poems of warning.

#### 【はじめに】

2011年3月11日、東北地方を襲った大地震の津波によって福島第一原発事故が起こった。事故から4年がたった今でも、福島県の住民約13万人が放射能被害を避けて避難生活を余儀なくされている<sup>1</sup>。事故の原因は「想定外」の大津波といわれるが、このような事態を「想定外」の語に収斂させてしまってよいのだろうか。振り返ってみれば、原発史上最悪、と言われた1986年のチェルノブイリ原発事故<sup>2</sup>によって放射能に汚染された雲は北半球を覆い、人々に恐怖をもたらした。日本でも大きな騒ぎになっている。この「チェルノブイリ」を私たち日本人一人一人が真摯に受け止めていけば、原発政策の見直しや事故対策が講じられ、今回の福島の事故も、もう少し被害は少なく抑えられ、人々の生活や故郷が守られたのではないか、と思わずにはいられない。私たちはチェルノブイリの事故に何を見て、何を考えて来たのだろうか。そして、文学はチェルノブイリ原発事故をどのように描いてきたのだろうか——。そのような想いから出発したのが「チェルノブイリ原発事故を巡る文学」の研究であり、本論はその一部である<sup>3</sup>。

#### 【1】詩人・若松丈太郎

福島第一原子力発電所から約25km、詩人・若松丈太郎は福島県南相馬市に住んでいる。彼は、1935年に岩手県に生まれたが、福島原発の建設が始まった60年代から福島県の浜通りで生活し、高校教師として国語を教えながらこれまでも原発を告発する詩や文章を書いてきた。初めは東電がなぜ管外に原発を建設するのだろうか、といった程度の疑問を持つにすぎなかった。しかし、福島原発1号機が稼働を始めた71年の夏に下北を旅し、大湊港で航行不能になった原子力船「むつ」が係留されている景色を見た事、そして、核関連施設の建設が話題になっていた半島部の風土と侘びしい光景が彼の住む双葉郡と似ていると感じた事で原発に関心を持ち、告発する詩や文章を書く契機になったという<sup>4</sup>。

そんな若松が、1986年のチェルノブイリ原発事故に大きな衝撃を受けたことは想像に難くない。1994年には「チェルノブイリ福島県民調査団」に参加し、モスクワからキエフを経由し、チェルノブイリを訪れている。5月17日は、ウクライナ医学アカデミー附属キエフ小児科・産婦人科研究所、ウクライナ医学アカデミー放射線科学臨床医療研

究所を訪問し、小児科医師二人と会食。翌・18日には、チェルノブイリ国際学術調査センター、チェルノブイリ原発、プリピャチ市、居住禁止区域内のパールシェフ村、事故後50km地点に作られた原発職員と家族のために作られたスラヴジチ市を訪問している<sup>5</sup>。その時の「報告書」として書かれたのが、11編の連詩「かなしみの土地」である。そして、この連詩は詩集『いくつもの川があって』<sup>6</sup>に収録された後、『福島 原発難民 南相馬市・一詩人の警告 1971年～2011年』<sup>7</sup>、『コールサック詩文庫 vol.14 若松丈太郎 詩選集一三〇編』<sup>8</sup>に再収録された。本論では、『コールサック詩文庫 vol.14』版を検討する<sup>9</sup>。

## 【2】連詩「かなしみの土地」

連詩「かなしみの土地」は、ウクライナ医学アカデミー放射線科学臨床医学研究所所長、ウラディーミル・ロマネンコの「わたしたちは世代を超えて苦しむことになるでしょう」という言葉を掲げて始まっている。ここには、若松のチェルノブイリ原発事故に対する想いが集約されている。周知のように放射性物質の中にはヨウ素131のように半減期が短いもの（8日）から、セシウム137の30年間、プルトニウム239のように半減期が24000年という非常に長い期間に亘って人々に影響を与えるものもある。そして、人々の遺伝子を傷つけ、がんや心臓病、身体の奇形、精神の病や死を招く。しかも、それはいつ人々を襲うかわからないという恐怖と共にある。チェルノブイリ原発の事故後、消火活動にあたった消防士たちのように、急性放射線障害により極めて短時間で死に至る場合もあるが、いつ発症するかわからないという不安を抱えて生きていくことを余儀なくされるのが核被害の恐ろしさである。それだけではない。遺伝子の傷は後の子孫たちにも影響し、何世代にも亘って、人間の心身に悪影響を及ぼす可能性がある。また、人間だけにとどまらず、動物、植物を含めて人間を取り巻く環境全体に影響を及ぼす。若松の選んだウラディーミル・ロマネンコの言葉は、我々に核被害の罪深さを知らしめる言葉であったはずだ。

連詩の初めは「プロローグ ヨハネ黙示録」である。チェルノブイリ原発事故は聖ヨハネの「黙示録」にすでに予言されていたとする言説を踏まえている。

その日と／その日につづく日々について／聖ヨハネは次のように予言した／  
たいまつのように燃えた大きな星が空から落ちてきた。  
／ 星は川の三分の一とその水源との上に落ちた。  
／ 星の名はニガヨモギと言って、  
／水の三分の一がニガヨモギのように苦くなった。  
／水が苦くなったため多くの人びとが死んだ。

しかし、「ニガヨモギ」を意味する東スラブの言葉で名づけられたチェルノブイリは、名付けられた時から「かなしみの土地」ではなかったはずで、1986年のチェルノブイリ原発事故ゆえにこの地の人々は悲しみを味わうことになった、と若松は指摘する。そして、若松が危惧するのはこれから人々は苦しみ続けるだろう、ということ。

この日と／この日につづく日々／多くの人びとが死に／多くの人びとが苦しんでいる  
さらに／多くの人びとが苦しむつづけなければならない

事故が一過性のものでなく、継続する時間として認識されていることは、先のウラディーミル・ロマネンコの「わたしたちは世代を超えて苦しむことになるでしょう」という言葉と重なっていく。

「1 百年まえの蝶」では、キエフに向けて飛び立つエアバスの中、100年前の同日5月16日に縊死した北村透谷に想いを馳せている。窓外に蝶を幻視し、透谷の「双蝶の別れ」の一節を引き、絶望のうちに命を絶った透谷とこれからチェルノブイリに向かう若松との間に重なるものはあるのかを模索している。

「2 五月のキエフに」は、「白い花をつけたマロニエ並木」が「石造りの街なみに似つかわしい」、  
「ヨーロッパでもっとも緑に富む都市」であるキエフを描いている。並木の下散歩道を歩き、ベンチで語らう人々。若松は「人びとにたちまじって幻境をさすらう」。現実から幻へ、若松の意識は彷徨う。後に触れるが、実はこうした現実と非現実の世界を行き来する意識の運動性こそ若松の詩の

特色だと考えられる。そして、「起伏の多い道は住む人びとのこのころの屈折を語っているか」とある通り、永らくロシア帝国とソ連邦の配下におかれたウクライナの人々の屈折した心を感じ取っている。マロニエの花は「シェフチェンコに捧げる花か」とあるが、シェフチェンコは近代ウクライナ語文学の始祖とみなされるウクライナの国民的詩人<sup>10</sup>。この反権力的な詩人・シェフチェンコの存在を浮かび上がらせることで、ウクライナの人びとの心に潜む反骨の精神を若松が感じ取っていることに注意したい。それは後述するように、原発事故のような不条理な出来事に対して決して運命とあきらめず、声を挙げようとする若松の精神と重なるものなのだ。

「3 風景を断ちきるもの」は、ウクライナとベラルーシの国境の検問所での詩。「ありふれた一本の道が遮断されて国境である」。道の上に線が引かれているわけではないが、ポールで遮断され、国境が作られている。道の上に国境線が引かれているつもりで、若松は片足立ちをする。テオ・アングロプロスの「こうのとりの、たちずさんで」<sup>11</sup>という映画の一場面をまねているのだ。この映画は、ギリシャ北部のアルバニア、ユーゴスラヴィアに接する国境近くの村が舞台である。そこにギリシャの入国許可を得ようと命がけて国境を越えて集まってきたアルバニア人、トルコ人、イラン人などの様々な難民の生活を描いている。映画の初め近くで国境警備隊の大佐が国境の持つ厳しい意味を知らせるべく、コウノトリのように片足で立ち、この線を超えると異国か死か、と語る場面がある。若松はそれをまねたのだ。映画の中の国境地帯は川や湖が多く、ウクライナ・ベラルーシ国境地帯のドニエプル川支流の低地と似ている。そして、コウノトリはウクライナやベラルーシでよく見かける、この地方のシンボリックな鳥である。しかし、私たちはコウノトリのように自由に飛翔はできない。飛び立てない私たちは、様々なところに境界を引く。その境界が視覚的によく表れた例として詩中に若松が挙げているのはヴィム・ヴェンダースの『ベルリン・天使の詩』である<sup>12</sup>。作中で人間になることを決意した天使が、天使と人間という「境」を超えた時、映像はモノトーンから色彩

にあふれた世界に劇的に変化する。この映画が示唆するように、国境のあちらとこちらでは世界は大きく異なる場合が多く、それだけに「国境」の意味は重く、超えることはたやすいことではない。その境界は私たちの心にもつながっていて、人を「差別」し、「難民」にし、時に「狙撃」する。しかし、こうした国境に佇む若松は、いともたやすく国境を越えていくものを幻視する。牛乳缶を積んだ小型トラックと共に風に乗って、目に見えない空中の放射性物質が国境を越えていくのである。この詩は、国境を超えることは難しいのに、人をあざ笑うかのようにやすやすとそれを越え、病や死を運んでいく放射性物質があることを我々に知らせる。

続く「4 蘇生する悪霊」は、事故後、放射性物質の飛散を防ぐために《石棺》と呼ばれるコンクリートで覆われたチェルノブイリ原子力発電所四号炉を描く。そこに「コンクリート五〇万m<sup>3</sup>と／鉄材六〇〇〇tとで／封じた冥王プルトの悪霊」の「蘇生」を感じ取っている。「アスファルト広場」は「石棺観光用展望台／ではなく焼香台」だと感じられ、「足もとに埋葬されている汚染物質」に「五分とここにはいたくはない」と思う。そして、その「イタクハナイ」という音の重なりから「痛くはないが／私たちは冒されている」と意味を続ける方法は目新しいものではないかもしれないが、効果的である。「冒された森林／時ならぬ紅葉であったと／《ニンジン色の森》／人びとの不安の形象／伐採され／埋葬され／周辺に森林なく／ここは満目蕭条」というように、「赤い森」<sup>13</sup>とも呼ばれた高放射性物質を取り込み赤茶色に変色して枯死した木々は、事故当時は汚染がひどいため、伐採して埋め立てるしかなかったのである。まさにチェルノブイリ原発は冥王・プルトに例えられる「死」の象徴であり、その周縁も死の領域なのである。

「5 《死》に身を曝す」は、チェルノブイリ原発30km圏内の様子を記した散文詩。「満目蕭条」としたいわば「死」の領域である30km圏内には、実は現在も原発や関連施設で働く人々が生活し、日常生活が営まれているという一面を持つ。2週間勤務の交代式とはいっても、やはり被曝による身

体への影響が危惧される。しかし、こうした労働者として原発で働く人々以外にも30km圏内には住人がいる。それは「サマショール」と呼ばれる高齢者の存在である<sup>14</sup>。故郷恋しさから、または避難先の生活になじめず、自ら放射能汚染地域に帰還した彼らは「生きるためには《死》に身を曝さねばならない」のである。死の世界に混じり合う、二つの「生」の形を捉えて、原発から30km圏内の地が持つ生と死の両義性を描いている。

さて、「6 神隠しされた街」は、この連詩の中核をなすものであり、もっとも、若松丈太郎の詩の特色がよく表れた詩である。「神隠しされた街」とはプリピャチのことだ。チェルノブイリ原発に関わる人々が居住したこの街は、劇場やプール、遊園地なども兼ね備えた、当時は進歩的で豊かな街だった。しかし、事故によって避難警報が出され、「多くの人々は三日たてば帰れると思って」「千百台のバスに乗って／四万五千の人びとが二時間のあいだに消えた」のである。この様子は当時の記録動画にも残されていて、緊迫した状況が伝わってくる<sup>15</sup>。しかし、そこには次のような描写はない。

鬼ごっこする子どもたちの歓声が／隣人との垣根ごしのあいさつが／郵便配達夫の自転車のベル音が／ボルシチを煮るにおいが／家々の窓の夜のあかりが／人びとの暮らしが／地図のうえからプリピャチ市が消えた

若松は、チェルノブイリ原発事故に伴う住民避難という事実から、声や音、におい、あかりなど当時の人々の暮らしぶりを五感を駆使して想像しているのだ。そして、その想像は、プリピャチの地に留まらない。

近隣三村をあわせて四万九千人が消えた／四万九千人といえば／私の住む原町市の人口にひとしい

というように、若松の住む日本の福島に及ぶ。さらに、

原子力発電所中心半径三〇kmゾーンは危険地帯とされ／十一日目の五月六日から三日のあいだに九万二千人が／あわせて約十五万人／人びとは一〇〇kmや一五〇km先の農村にちりぢりに消えた

「30km」と「15万人」という具体的な数字が彼の想像力を刺激し、次のように続ける。

半径三〇kmゾーンといえば／東京電力福島第一原子力発電所を中心に据えると／双葉町 大熊町 富岡町／楡葉町 浪江町 広野町／川内村 都路村 葛尾村／小高町 いわき市 北部／そして私の住む原町市がふくまれる／こちらをあわせて約十五万人／私たちが消えるべき先はどこか／私たちはどこに姿を消せばいいのか

チェルノブイリの現実から想像力によって日本の現実をまなざした時、見えてくるものを描いているのだ。ここに挙げられた地名は、現在の日本人なら少なからず聞き覚えがあるのに違いない。なぜなら、福島原発事故後に、放射能汚染と避難に関するニュースで、連日、これらの町の名前が呼ばれていたからである。つまり、30kmと15万人という数字から若松が連想した事態は、そっくりそのまま現実になってしまったのである。このことから若松は予言者であるかのような錯覚に陥るが、実はそうではない。若松はチェルノブイリの現実をそのまま、福島に当てはめただけなのである。そして、この詩の世界が想像で終わらず、現実となってしまったことは残念の極みである。それを最も感じていたのは、他ならぬ若松自身であろう。若松はその怒りについても書いているが<sup>16</sup>、詳細は別稿に譲ることとする。

事故八年のちの旧プリピャチ市に／私たちは入った／亀裂がはいったペーヴメントの／亀裂をひろげて雑草がただけしい／ツバメが飛んでいる／ハトが胸をふくらませている／チョウが草花に羽をやすめている／ハエがおちつきなく動いている／蚊柱が回転している／街路樹の葉が風に身をゆだねている

若松はプリピャチの町に歩み入る。こうしたプリピャチの町の一つ一つの「現実」への凝視が「事実」の重みを導き出していることに私たちは気づくはずだ。そして、どんなにこの街を隈なく探しても、そこに人の声は聞こえず、人の歩く気配はない。若松はこの街を「四万五千の人びとがかくれんぼしている都市」と呼ぶ。「幼稚園のホールに投げ捨てられた玩具」や「台所のこんろにかけら

れたシチュー鍋」,「オフィスの机上のひろげたま  
まの書類」など「ついさっきまで人がいた気配は  
どこにもあるのに／日がもう暮れる」,そして,「鬼  
の私はとほうに暮れる」。人々の暮らしを容易に想  
像することができるのに,そこに人々はいない。  
「広場にひとり立ちつくす」「私」は「神隠し」に  
あったかのようだ。そして,無人のプリピャチの  
街は静かにゆっくりと滅亡に向かって歩き始めて  
いる。ここに住んでいた人々の命も蝕まれている  
が,街も同じ運命を辿っている。まさに「ほろび  
をきそいあう」状態なのである。こうした状態を  
生み出したのは,他でもない「人間」であることを  
若松は見逃していない。

ストロンチウム九〇 半減期二九年／セシウ  
ム一三七 半減期 三〇年／プルトニウム  
二三九 半減期二四〇〇〇年／セシウムの放  
射線量が八分の一に減るまでに九〇年／致死  
量八倍のセシウムは九〇年後も生きものを殺  
しつづける／人は百年後のことに自分の手を  
下せないということであれば／人がプルトニ  
ウムを扱うのは不遜というべきか

現段階では人間の及ぶ力を超えた核エネルギーを  
使いこなせると信じ,原発を造り依存してきた人  
類に対し,若松は素朴でかつ最もストレートな表  
現「不遜」という語を用いて警告を発している。  
我が身を顧みない人類には「神隠しの街は地上に  
いっそうふえるにちがいない／私たちの神隠しは  
きょうかもしれない」のである。

このような「神隠しされた街」は,若松がプリ  
ピャチの現実を直視し,そこから想像力によって  
過去のプリピャチの街へ,そして,日本の福島へ  
と自在に意識が跳躍した結果を示している。その  
想像した光景が福島第一原発事故によって現実  
になってしまったことは不幸であったが,逆に言え  
ば福島原発がもし事故を起こせば,どのような事  
態に陥るかは予測できた,ということになる。し  
かし,私たちはそれを見逃してきた。その結果が  
現在の日本の状況なのである。若松と同じく,透  
徹したまなざしでチェルノブイリをみつめ,そし  
て,それを日本に置き換えたならどうなるのか,と  
想像力を働かせれば,福島原発事故はもう少し  
違った結果になったのではないだろうか。

このような遅すぎた反省を述べても取り返しは  
つかないのだが,注意すべきは,最もこうした事  
態の悪しき影響を受けるのは子供たちである,と  
いうことだ。「7 囚われ人たち」は,キエフ小児  
科・産婦人科研究所の病院に入院している子ども  
たちに会った際のスケッチである。若松を捉えた  
のは,「ウクライナとベラルーシの子どもたちは囚  
われ人なのではあるまいか」という思いだ。彼ら  
は次のように描かれている。

医師と異国人とが通訳を介して自分たちを話  
題にしているその片言隻句のなかから,自分  
の貶められている不条理な状況についての情  
報を読みとろうと,子どもたちは注意力を集中  
している様子であった。

自分の世代に背負いこんだ負の遺産を未来の子  
供たちに寄託することは,まさに次世代を生きる子  
供たちにとってみれば,エゴイスティックな大人  
たちに押し付けられた「不条理」以外の何物でも  
ないであろう。そんな子供たちの不安と困惑を代  
弁している。そして,この詩には「冬に」という  
詩が挿入されている。この詩は,アレシ・アダモ  
ビッチの原作『ハティニ物語』をもとに作られた  
映画「炎 628」<sup>17</sup>の少年・フリューラと少女・グ  
ラーシャが登場する。この映画はベラルーシのハ  
ティニ村をはじめとする628の村でナチスの行っ  
た集団虐殺を子供の視線を通して告発している。  
戦争に翻弄される子供たち。しかし,若松はそこ  
に留まらず,ハティニ村はチェルノブイリの風下  
に位置することにも思いを巡らしている。世界の  
歴史に踏みにじられ,想像力の翼を失い,閉塞状  
況に陥った「冬」のような日々。その中に閉じ込  
められているのが,「すべての子供たち」なのでは  
あるまいか,と想いを巡らしているのだ。

「8 苦い水の流れ」は,「プロローグ ヨハネ黙  
示録」の続編的な内容の詩である。プリピャチ川  
の近くに位置するチェルノブイリ原発。その事故  
によって広がったセシウム137は,「プロローグ  
ヨハネ黙示録」で書かれたように川の上流三分  
の一を汚染し,葬られた汚染物質や石棺から滲み出  
る核物質は「苦い水」となってプリピャチ川に,  
そしてドニエプル川に注ぐ。水の惑星・地球は「苦  
い水」によって汚染されていくのである。そして,

この思いは「9 白夜にねむる水惑星」に受け継がれる。モスクワを經由して帰国の途に就く若松は、白夜の中、機上から汚染された川が地上を流れていく風景を想像し、チェルノブイリへの旅の詩を終えている。しかし、「1 百年まえの蝶」に現れた窓外の「蝶はいない」。その理由は「エピローグ かなしみのかたち—東京国立博物館で国宝法隆寺展をみる」に読み取れる。日光菩薩像を前に、ウクライナの子供たちを想い、「人のかなしみは千年まえ／も いまも変わらないのだ／そして過去にあった／ものは 将来にも予定されてあるのだ」と書く。100年まえの虚と実に引き裂かれた透谷の絶望を飲み込み、更なる悠久の時間の流れの中でチェルノブイリの悲しみを「人のかなしみ」として昇華し、理解しようとしている。コールサック社刊の『福島原発難民』では「1 百年まえの蝶」と「エピローグ かなしみのかたち」が省略されたが、今回検討した初出形を採った『コールサック詩文庫 vol.14』版は、チェルノブイリを壮大な時間の流れの中で人類の悲しみとして普遍化しているといえよう。

### 【3】若松丈太郎の詩の方法と詩人の使命

こうして11編の詩を連詩として読んでみると、若松丈太郎の詩の方法が見えてくる。若松は透徹したまなざしで現実を直視する。そして、想像力によって跳躍する<sup>18</sup>。この現実へのまなざしは、この連詩のみに見られるものではない。たとえば、詩集『北緯37度25分の風とカナリア』<sup>19</sup>に収められた「みなみ風吹く日」という詩がある。

この詩は「岸づたいに吹く／南からの風がこちよい／沖あいに波を待つサーファーたちの頭が見えかくれしている／福島県原町市北泉海岸」の光景を描いている。ここは福島第一原発から25kmの地点だ。この詩の1では、この25km半径内ではこれまでに植物の異変、そして、生物の体内、小学校の校庭の空気中からの核物質の検出、若松自身の脱毛など、原発操業との関係性が疑われることが何度もあったことが示される。しかし、それが認められることはなかった。この海岸からは、波間に漂うサーファーたちの姿のはるか沖合にフェ

リーが近づき遠ざかる姿も見える。「気の遠くなる時間が視える／世界の音は絶え／すべて世はこともなし／あるいは／来るべきものをわれわれは視ているか」という部分からは、現実の断片を重ねることで何か見えてくるものがあるはずなのに、それを見過ごしている人々の存在を告発している。目の前に広がる何事もない平穏な光景は、もしかしたら「死」の世界なのかもしれない。詩の後半、2の部分ではこれまでの原発での事故の事実が重ねられていく。制御棒の脱落で臨界状態が7時間30分も続いたことや、臨界状態で緊急停止したことなど、数々の事故が隠蔽され、2007年3月に初めて明らかになったことを書き留めている。こうした事実をまっすぐに受け止めれば、我々の生存は奇蹟的なものなのかもしれないという感慨に浸るのは自然なことだろう。当然、今見える光景は幻なのではないかという想いも生じる。それを表すように、詩の末尾は次の一行である。「われわれが視ているものはなにか」。

こうしてみると、若松丈太郎の詩の方法は、まず強靱な「現実凝視」の意識に支えられており、そこから風景の意味を探ろうとしていることがわかる。当然、目の前の光景は二重写しになる。表面上の光景は実は表層に過ぎないのではないか。そんな若松の思いが「われわれが視ているものはなにか」という一行を生み出している。この意識の運動性こそが若松の詩のメカニズムを象徴しているのではないだろうか。こうした方法は若松の生涯を貫くものである。たとえば「連詩 霧の向こうがわとこちらがわ」の中の次の一節。

ほんとうに今ここは〈事もなし〉なのだが／この瞬間この場所だけのこともかもしれない／幻景を見ているにすぎないのかもしれない／演奏されているピアノ曲も幻聴で／花ばなのあいだをたわむれてきた風と／五月の青い空を飛んできたポプラの綿毛と／たしかなのはこうしたものだけかもしれない

(「1. ジェラゾヴァ・ヴォーラの空」)<sup>20</sup>

現実を見つめることで、目に見えるものの輪郭は曖昧なものとなり、意識は不確実性に辿り着く。それは「騙し絵の世界 生と死とが複雑に交錯していてくるり反転すると／見えていたものが消え

／思いもかけぬ光景が浮びあがる」<sup>21</sup>というように、騙し絵の図柄の反転として描かれる。また、同じ「連詩 霧の向こうがわとこちらがわ」の中の「2 ゲットー英雄記念碑のレリーフ」では埴谷豊から示唆を受けた「ものの裏がわも見ること」により記念碑の後ろ側に回り、「英雄」の側ではなく「魂までうちひしがれて歩いている数知れない多くの人びとの群れが幽鬼となって集ってきていた。彼らはレリーフに刻み込まれた歴史のなかの人びとではなく、二〇〇三年の現実のなかの人びとなのだ。」と記す。表と裏を反転させるだけではなく、そこから時を越えて、現代のパレスチナ問題に想いを馳せている。こうした跳躍する想像力こそが若松の詩の根幹をなしているのである。

チェルノブイリの現実に即して、福島をまなざす若松は次のように書く。

私たちは私たちの想像力をかりたてなければならぬ。最悪の事態を自分のこととして許容できるのかどうか、想像力をかりたててみなければならぬ。(略)

しかし、再悪の事態とは次のようなものを言うのではなからうか。それは、父祖たちが何代にもわたって暮らしつづけ、自分もまた生れてこのかたなじんできた風土、習俗、共同体、家、所有する土地、所有するあらゆるものを、村ぐるみ、町ぐるみで置き去りにすることを強制され、そのために失職し、たとえば、十年間、あるいは二十年間、あるいは特定できないそれ以上の長期間にわたって、自分のものでありながらそこで生活することはもとより、立ち入ることさえ許されず、強制移住させられた他郷で、収入のみちがないまま不如意をかこち、場合によっては一家離散のうきめを味わうはめになる。たぶん、その間に、ふとどきな者たちが警備の隙をついて空き家に侵入し家財を略奪しつくすであろう。このような事態が一〇万人、あるいは二〇万人の身にふりかかってその生活が破壊される。このことを私は最悪の事態と考えたのである。

これは、チェルノブイリ事故の現実に即して言うことであって、けっして感傷的な空想

ではない<sup>22</sup>。

ここに描かれたことは、2011年の原発事故後に福島の人々が置かれた状況そのままである。現実への凝視と跳躍する想像力。福島原発事故前の私たちに欠けていたのはまさにこの点だったのであろう。

付言すれば、現実を凝視し想像力によって原発に向けられた若松の視線は、原発設置地域がさらに原発を招く社会構造をも指摘している。

ここは福島県の浜通りと呼ばれる地方である。(略) それにしても、原子力発電所周辺に住んでいることで感じる背筋に刃物を突きつけられているような感覚は理解してもらえらうか。私が勤務している高校の生徒たちに聞いても、たいがいは「こわい」と答える。それが正常な感覚というものであろう。

で、三〇キロと三〇〇キロとが目くそ鼻くそなのに、東京とその近郊に住んでいる人たちが、「こわい」とうけとめることができないとしたら、それは、感覚が鈍麻しているか、想像力が貧困なのだと言ってさしつかえないのではなからうか。

かくして福島県の浜通り地方は、原子力発電所をこわがって人が寄りつかないため人口密度が希薄になり、いや、人口密度が希薄なので一〇基もの原子力発電所が立地し、いっそう人離れしてしまうという構造ができあがってしまったのである<sup>23</sup>。

そして、それと引き替えに、一時的かもしれないが原発立地地域は「雇用の増大と地域の活性化」やサッカーグラウンドも作ってもらえるという恩恵も被るのだ。しかし、若松の透徹したまなざしはこの欺瞞を発く。

誘致する町も、誘致に関わっている人びとも、誘致を黙認している人びとも、実際のところは原発が欲しいのではない。電力会社や国がくれるおまけが欲しいだけである。ちょうど、おまけが欲しいばかりに、いらぬお菓子を買うこどもたちのように<sup>24</sup>。

このように、原発設置の代償に支払われる交付金によって地域運営をまかなう結果、交付金なしでは自力で立つことができなくなってしまう、いわ

ば交付金中毒症状を明らかにし、原発が本当に必要なのかという問題を、若松は真摯に読者に考えさせる。

こうした発信を続ける若松を支えているのは「詩人の使命」の認識ではないか。

わたしたちの文明は、その文明を自己崩壊させかねない〈核〉という疫病神をとり込んでしまった。その疫病神はわたしたちの手に届かぬところ、東西の戦略システムの中核や巨大な発電所建屋のなかに置かれ、わたしたちは不安におびえながら腕をこまねいているしかない状況である。しかし、詩が時代を告発する役割を担っているものであるとするならば、詩人はことばをもってこの核状況を撃つべきであろう。詩によって福島県〈浜通り〉の地域的な問題を世界の普遍的な問題に重ねることが可能となるのである<sup>25</sup>。

「詩が時代を告発する役割を担っているものであるとするならば、詩人はことばをもってこの核状況を撃つべきであろう。」という部分は、若松と同じ岩手県出身の石川啄木の精神と通底するものがある。啄木は初期の詩集『あこがれ』の中の「啄木鳥」で<sup>26</sup>、

聞け、今、巷に喘げる塵の疾風／よせ来て、  
若やぐ生命の森の精の／聖きを攻むやと、終日、  
啄木鳥、／巡りて警告夏樹の髓にきざむ。  
(略)

霊をぞ守りて、この森不断の糧、／奇かるつとめを小さき鳥のすなる。

と、詩人の自負と使命感を記した。若松は現実凝視から想像力によって跳躍しても、啄木と同じように、言葉をもって警世の存在であろうとする。若松は2011年の末に「年の暮れに」という文章を書いている<sup>27</sup>。そこには、福島原発事故が起こったために人々の生活が壊され、自分自身も詩や文学から遠く離れたところを彷徨っている悔しさを滲ませながら、「だが、撃つべきは撃たねばなりません。」とある。このゆるぎない「詩人の使命」が若松を支えているのではなかったか。

## 【終わりに】「福島原発事故」後を生きる

若松は「広島で。〈核災地〉福島、から。」の<sup>28</sup>中で、原発を〈核発電〉、原発事故を〈核災〉と呼ぶことにした、と書く。その理由は、おなじ核エネルギーなのにあたかも別物であるかのように〈原子力発電〉と称して人々を偽っていることを明らかにするためであり、〈核発電〉と表現することで〈核爆弾〉と〈核発電〉とが同根のものであることを意識するためであるという。また、〈原発事故〉は、単なる事故として当事者だけにとどまらず、空間的にも時間的にも広範囲に影響を及ぼす〈核による構造的な人災〉であるという認識からである。福島原発事故後の若松丈太郎は自ら予感していた事故が現実のものになってしまったことに怒りと後悔を抱え、核災を繰り返さないために、悲壮な覚悟で発信を続けている。福島原発以後の若松についてはまた、別の稿で論じたい。

## 【付記】

本論は、科学研究費補助金、基盤研究(C)、研究課題番号40249272、「チェルノブイリ原発事故を描いた文学の研究」(研究期間2013年4月～2016年3月)の成果の一部である。

<sup>1</sup> 環境省の平成25年版「環境・循環型社会・生物多様性白書」によれば、平成25年3月時点での東京電力福島第一原子力発電所事故による福島県全体の避難者数は約15.4万人に上る。また、復興庁による平成26年2月の福島県の避難者は、県内に8.8万人、県外に4.8万人、計13.6万人である。

<sup>2</sup> 1986年4月26日午前1時23分、チェルノブイリ(Chernobyl)原発(現・ウクライナのキエフから北に約100kmに位置)、第4発電ブロックで非常用の電源テスト中、核暴走事故が起き、2度の爆発と火災が発生した。原因は、出力調整電源テスト従事者の規則違反や、チェルノブイリ型RBMK原発の制御棒設計に欠陥があり暴走しやすかった点などが挙げられている。事故によって環境中に放出された放射性物質はヨーロッパ諸国を始めとして、北半球の大部分の地域に達した。事故直後、発電所職員や消防士に計31人の死者が出たが、そのほとんどは急性放射線障害によるものである。その後、上空から炉を密閉するための作業、地底から炉を冷却する工事、第4発電ブロックを覆う「石棺」の建設、除染

作業など、事故処理のために約80万人の兵士や労働者が動員された。彼らは「リクビダートル」または「バイオ・ロボット」とも呼ばれ、多くの被曝者を生んだ。原発から半径30km周辺は放射能汚染危険区域として強制移住区域となり、住民約135,000人が避難させられ、現在も居住が禁止されている。しかし、廃村に戻り生活している「サマシヨール」と呼ばれる高齢者の存在もある。また、この放射能汚染危険区域外の200km以上離れた区域にも「ホット・ゾーン」と呼ばれる局所的高濃度汚染地域が点在していて、住民は移住を余儀なくされた。『調査報告 チェルノブイリ被害の全貌』アレクセイ・V・ヤプロフ他、(岩波書店、2013年4月)、p.23の「表1.7 ベラルーシ、ウクライナ、ヨーロッパロシアにおけるチェルノブイリ大惨事の被害を受けた人口」によれば、被災3カ国（ウクライナ、ベラルーシ、ロシア）では、チェルノブイリ事故による汚染のため家を離れざるを得なかった人は約35万人と報告され、90年ごろよりチェルノブイリ原発事故が原因とみられる子供たちの甲状腺がんの急増が報告されている。また、汚染地域居住者や事故処理作業にもさまざまな疾患の増加が見られ、がん、心臓病などを発症し多数が亡くなっている。この点について、ベラルーシでは次のような報告がある。「成人の甲状腺がん罹患率は、6倍以上増加している。子ども（1986年当時0-14歳）の発症のピークは1995-96年で、1986年と比較して39倍にも増している。」（『チェルノブイリ原発事故ベラルーシ政府報告書 最新版』ベラルーシ共和国非常事態省チェルノブイリ原発事故被害対策局編、産学社、2013年、p.51の「甲状腺の被曝線量」の項）

- 3 既発表論文としては、「スペトラーナ・アレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』を読む」（『国際文化表現研究』10号、国際文化表現学会、2014年3月）、「グールドン・パウゼヴァング『みえない雲』を読む」（『国際関係研究』35巻1号、日本大学国際関係学部、2014年11月）がある。
- 4 「インタビュー 若松丈太郎 ここにどんな未来が……」（『民主文学』日本民主主義文学会編、2013年3月）
- 5 「キエフモスクワ1944年」（『北の灯』第45-47号、北の灯社、2000年6月15日・10月20日・2001年3月20日。後、『イメージのなかの都市 非詩集成I』ASYL社、2002年刊、『福島核災棄民一町がメルトダウンしてしまった』コールサック社、2012年に収録。）
- 6 花神社、2000年、福島民報出版文化賞受賞
- 7 コールサック社、2011年
- 8 コールサック社、2014年
- 9 『コールサック詩文庫vol.14 若松丈太郎 詩選集一三〇編』は若干の語句の訂正を施した上で初出の詩集『いくつもの川があって』と同じ形態をとっているが、『福島 原発難民 南相馬市・一詩人の警告 1971年～2011年』に掲載する際に、「プロローグ ヨハネ黙示録」が「1. ヨハネ黙示録」となり、「1 百年まえの蝶」が割愛された。この詩には透谷の自死の日付けが明記され、

「双蝶の別れ」の一節が引用されている。以後、「白夜にねむる水惑星」までは同じ詩と順番であるが、初出および『コールサック詩文庫』ではその後に「エピローグ

かなしみのかたち 東京国立博物館で国宝法隆寺展をみる」を付している。本論では、連詩は『コールサック詩文庫vol.4 若松丈太郎 詩選集一三〇編』（コールサック社、2014年）のpp.88-100より引用している。

- 10 タラス・フルィホローヴィチ・シェフチェンコ。1847年4月5日-1861年3月10日。ウクライナ語で書いた詩集『コプザール』など。農奴制に反対し、その解放のために秘密結社「聖キリルと聖メソジウス団」に関与、皇帝ニコラウス一世とその妻を批判する詩がみつきり逮捕され、10年間の流刑生活を送った。
- 11 テオ・アングロプロス監督による1991年の作品。出演はマルチェロ・マストロヤンニ、ジャンヌ・モローほか。
- 12 1987年、西ドイツ・フランスの製作。出演はブルーノ・ガンツ、ソルヴェイク・ドマルタンほか。
- 13 チェルノブイリ原発から10km圏内の森は、高レベルの放射性物質を取りこんだことで松が赤茶色に枯死したことから、「赤い森」とも呼ばれる。汚染がひどいため、松は伐採してその場に埋められた。その後の近辺の生態系には動植物を問わず、放射性物質によると考えられる変異が見られるが、人間が去ったことにより、逆に草木が生い茂り、自然が繁栄しているという見方もできる。
- 14 「自ら移動する人」という意味で、避難先の生活になじめず、また故郷恋しさから勝手に立ち入り禁止区域に帰還する人々である。高齢者がほとんどで、かつては1200名ほどだったが、2013年では、約140人とされる。
- 15 『ZERO HOUR チェルノブイリ原発事故 ディスカバリーチャンネル』角川書店、2006年、など。
- 16 若松は、「広島で。〈核災地〉福島、から」（核兵器廃絶をめざすヒロシマの会主催「8.6ヒロシマ国際対話集会—反核の夕べ2012」2012年8月6日、広島市民ふれあい交流プラザでの発言のために用意した文章。実際には、この一部だけを話した。『福島核災棄民一町がメルトダウンしてしまった』（コールサック社、2012年）所収。この「6. 〈核災地〉の現状」の中で、「(略) わたしはチェルノブイリを訪問した一九九四年に、このときの経験をもとに、連詩「かなしみの土地」を書き、〈核災〉難民となった人々の思いを代弁したつもりであった。しかし、そのとき彼らの思いだと思っていたものは現在の自分の思いそのものであるという現実の中にわたしが置かれていると認識したとき、いや、それ以上にひどいと思えない現実を意識したとき、わたしの腸は煮えくりかえって、収まることがなかった。なぜなら、起こるべくしておきた人災であり企業災だと考えられたからである。」と書いている。また、同じ年のエッセイ「原子力発電所と想像力」では福島第一で〈核災〉

- が発生したときに周辺住民に及ぶであろう生活上の最悪事態を想定してみた。しかし、3.11から一年あまりのいま、わたしたちが暮らす地域の現実、十八年まえに想定した最悪事態以上の事態であると、わたしには〈体感〉されている。」と書いている。
- <sup>17</sup> エレム・クリモフ監督、1985年、モスフィルム・ベラルシフィルム制作。
- <sup>18</sup> 赤坂憲雄は若松丈太郎との対談「原発と文化 3.11以前／以後の風景」(『震災学』2, 2013年, pp.78-91)の中で、「若松さんの『詩集 北緯37度25分の風とカナリア』に出会ったときも、垂直方向への跳躍を感じました。現実世界から幻想の世界へ垂直に飛ぶ、そのあり方が東北的です。」と述べ、冒頭の作品「偏西風にまかせて」では、北緯37度25分の同じ緯度上に原発やエネルギーをめぐる風景が連なることを書いた例を挙げている。しかし、論者が強調したいのは、跳躍する前に現実を凝視するまなざしが若松には確固としてあること、である。若松丈太郎の場合、現実をまなざすことなくして、想像力を駆使する方法はあり得ない。
- <sup>19</sup> 弦書房、2010年、本論では『コールサック詩文庫vol.14 若松丈太郎 詩選集一三〇編』(注8参照) pp.188-190より引用。
- <sup>20</sup> 「連詩 霧の向こうがわとこちらがわ」[1 ジェラゾウヴァ・ヴォーラの空], 『越境する霧』(弦書房, 2004年)所収。本論では『コールサック詩文庫vol.14 若松丈太郎 詩選集一三〇編』(注8参照) pp.117-119より引用。
- <sup>21</sup> 「恐山」, 第二詩集『海のほうへ 海のほうから』(花神社, 1987年刊)所収。本論では『コールサック詩文庫vol.14 若松丈太郎 詩選集一三〇編』(注8参照) pp.58-62より引用。
- <sup>22</sup> 「原子力発電所と想像力」(一九九四年九月十日), 『福島原発難民』(注7参照)所収。pp.56-62。
- <sup>23</sup> 「東京から三〇〇キロ地点」(『詩と思想』1991年6月1日), 後に『福島原発難民』(注7参照)所収。本論では『福島原発難民』 pp.24-26より引用。
- <sup>24</sup> 注22と同じ。
- <sup>25</sup> 「吉田真琴『二重風景』」, 『福島県現代詩人会会報』第29号, 1987年5月25日, 本論では『福島原発難民』(注7参照) p.18より引用。
- <sup>26</sup> 『明星』明治36年12月, 「愁調」の総題で「杜に立ちて」などの4編と共に発表された。本論では、『日本近代文学大系 石川啄木集』(角川書店, 1969年) p.133より引用。
- <sup>27</sup> 『いのちの籠』第20号, (戦争と平和を考える詩の会, 2012年2月25日), 後、『福島核災棄民 町がメルトダウンしてしまった』(コールサック社, 2012年)所収。本論では『福島核災棄民 町がメルトダウンしてしまった』 p.13より引用。
- <sup>28</sup> 『福島核災棄民一町がメルトダウンしてしまった』(注16参照)のp.79。